2025
Vol.4

Road to the 150th

同志社創立150周年記念インタビュー
「同志社の志を継ぐ。」

2025年に創立150周年を迎える同志社。校祖・新島襄が1875年に設立した同志社英学校から始まり、良心教育を軸とする独自の理念を掲げ、今日では一貫教育体制をもつ総合学園へと発展してきました。節目の年にあたり、受け継いできた「志」とこれから果たすべき役割について、長く教育の最前線に立ち同志社を牽引し続ける八田英二総長・理事長に聞きました。

八田 英二氏 学校法人同志社 総長・理事長

Road to the 150th とは

「Road to the 150th」は、同志社創立150周年を記念して企画・実施される様々な事業をピックアップして、皆様にお伝えしていく同志社未来創造プロジェクト発行の広報メディアです。2025年11月29日に迎える150周年という節目を、同志社の建学の理念と共に歩んだ軌跡を振り返り、未来に向けた一歩を踏み出す機会とするべく、同志社と関わるすべての人が、同志社の過去、現在、未来についてあらためて考えるきっかけとなることを目指して作成しています。

同志社創立150周年記念インタビュー

「同志社の志を継ぐ。」

学校法人同志社
総長・理事長 八田英二

同志社の理念
アイデンティティについて

――同志社の創立者・新島襄という人物を、総長はどのように捉えておられますか？

新島襄は、教育者であると同時にキリスト教の宣教師でもあった稀有な存在だと捉えています。彼は1864年、わずか21歳で国禁を犯し、函館から脱国してアメリカに渡りました。約10年にわたり、フィリップス・アカデミー、アーモスト大学、そしてアンドーヴァー神学校で勉学に勤しみ、1874年11月、大志を抱いて準宣教師として帰国しました。その後は海外で得た知見をもって東奔西走し、1875年11月29日、キリスト教主義に基づく人間教育に重点を置いた同志社英学校を設立しました。その志の強さは、彼の教育観からも明らかです。彼は単に学問の追求だけを目的とせず、「知識あり、品行あり、自ら立ち、自ら治むるの人民」の育成を目指したのです。この志こそが、今日まで同志社に息づいている根源であり、我々が大切に継承していくべき精神だと考えています。

――150周年という節目に、新島襄の精神をどのように未来へと継承していくべきとお考えですか？

150周年というのは単なる通過点ではありません。過去の積み重ねを振り返り、現在の課題を明確化し、そして未来へのビジョンを描く、その好機ととらえるべきでしょう。同志社はかねてより「キリスト教主義」「国際主義」「自由主義（リベラル・アーツ）」を高く掲げ、その根底にあるのが建学の精神である「良心教育」です。この精神は、どれだけ時代が移り変わろうとも常に同志社の核であり続けました。これからもまたそうです。現代はデジタル化、価値観の多様化が進行する社会です。そのような時代だからこそ「何が正しいか」「どう生きるべきか」を自らの良心に問いながら判断し、行動できる自治・自立の人物が求められています。節目を迎える今、創立者はこの学校からいかなる日本の未来を描こうとしたのかに思いを馳せ、そこで学ぶ私たちの考え方を発展させる手がかりを見つけることが必要かもしれません。

――同志社の独自性や強みは、どこにあるとお考えですか？

同志社教育の独自性は「知育・徳育・体育」の三位一体によるバランスのとれた人物育成にあり、その根幹にあるのがキリスト教主義に基づく「良心教育」です。知識の習得だけでなく、人間教育を重視している点で他の多くの学校と一線を画しています。新島は他の多くの私学の創始者のように、近代国家に益する特定の職業人（たとえば、法律家）の育成を目指したわけではありません。新島襄が掲げた「一国の良心」という言葉に象徴されるように、同志社の

教育が目指すのは良心を手腕に運用する人物の育成です。良心教育とは、単に道徳的に正しい人間を育てるということではなく、自らの信念に基づいて行動し、他者や社会に対して責任を果たすことのできる人物を養成することに他なりません。同志社には「人を育てる」という熱意を持ったたくさんの教職員がいます。新島の追求した良心教育を理念として掲げるだけでなく、それは何かを自問自答しながら教育活動を実践しています。それこそが同志社の持つ独自性であり、強みであると考えています。

――ご自身も同志社で学ばれ長く関わってこられた中で「これこそが同志社」と感じた瞬間はありましたか？

同志社で過ごしてきた中で特に印象深いのは、卒業生が自分の子どもや孫を同志社に通わせたいと話す場面に何度も出会ってきたことです。それは、同志社の教育が信頼され、価値あるものとして認識されている証です。親が自分の受けた教育を子どもにも受けさせたいと思い、さらには三代、四代にわたって同志社に通うという話も珍しくありません。それは、単に偏差値などの表面的な評価よりもずっと意味があり、教育機関として誇りに思えることです。こうした伝統と信頼の積み重ねが、同志社という学び舎の本質であり、新島襄が理想とした教育が今日まで脈々と生きている表れなのだと感じます。

教育を取り巻く環境

――現代の教育を取り巻く環境をどうお考えですか？また、その中で私学が果たすべき役割とは何でしょうか？

現在、日本は深刻な少子化の只中にあります。2024年の出生数は約72万人。大学を例にした場合、18年後に進学するのは現在の進学率62％で試算すると約45万人にとどまります。これは、現在の国公私立大学全体の募集人員約63万人と比較して、およそ18万人分の学生が不足する、ということを意味します。この問題はすでに顕在化しており、学生の進学先が都市部に集中する傾向とも相まって、特に地方の小規模な私学においては学生の確保が年々困難となっており、定員割れや学生募集の停止といった事例も増加しています。こうした厳しい環境下において私立大学が生き残っていくためには、建学の精神に則り、教育の特色や独自性を明確に打ち出すことが不可欠です。国公立大学とは異なる自由度を生かして、教育や研究の内容に個性を持たせると同時に、社会の変化に対応した柔軟なカリキュラムの構築が求められています。

同志社が果たすべき役割とは？

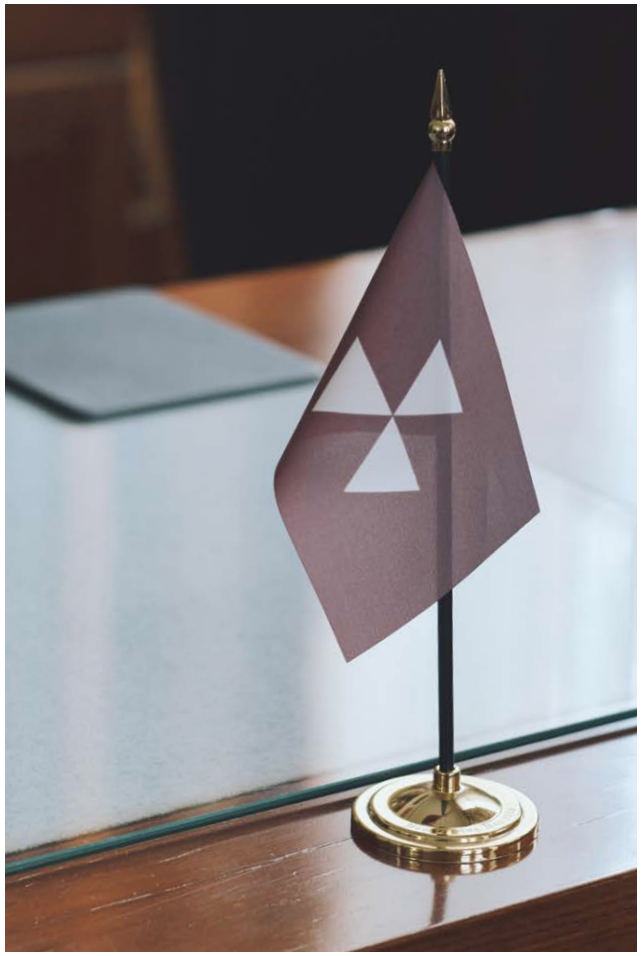
――同志社が果たすべき役割とは何でしょうか？

同志社の果たすべき役割は、建学の精神に立ち返り、新島襄が思い描いたような学校を目指し続けることにあると思います。知識やスキルを教えるだけでは、今の時代、なかなか学校間の違いを出すのは難しいものです。AIやグローバル化といった新しい課題には、どこも対応しようとしています。だからこそ私たちは、私学としての独自性、すなわち建学の精神である「良心」に根差した教育の意義をあらためて明確にする必要があると感じています。そして、良心を育むことはゴールではありません。同志社の教育が目指しているのは、その良心を社会の中で発揮し、社会に還元していける人物の育成です。新島は「官吏となって出世しろ」とは言っていません。大切なのは、良心教育を受けた卒業生が、それぞれの立場で「地の塩、世の光」となって周囲に良い影響を与えていくこと。同志社はこれからもそうした人物を世に送り出し続けたいと思います。

――同志社が取り組むべき課題とは何でしょうか？

現在、教育を取り巻く社会環境は急激に変化しています。デジタル社会の到来、そして学びの多様化や生涯学習へのニーズも高まっています。こうした変化の中で、同志社がこれまで培ってきた理念をどう現代に活かし、どのような教育サービスとして提供できるか。これをあらためて考えていく必要があるのではないでしょうか。また、少子化が一層進む中で、国際主義を標榜してきた同志社としては、これまで以上に世界からより多くの優れた人材を受け入れ、世界に通用する大学として成長していくことが重要だと思います。同志社の良心教育は、日本国内だけで通用するものではありません。むしろ、グローバルな課題が山積する今の世界こそ、その価値はより広く共有されるべきものです。このように、新島の志を海外に向けても発信し、伝えていくことが、これから私たちが取り組むべき大きな課題だと感じています。

「地の塩、世の光」として社会に貢献する、そうした人物を世に送り出し続けたい。



良心教育を学んだ卒業生が、
自身の子も同志社で学ばせたいと思う。
この好循環こそ、同志社教育の理想。

——同志社の一貫教育において今後より強化する点は何でしょうか？

同志社には幼稚園から大学・大学院までを擁する一貫教育があります。学校や年齢によってアプローチは異なりますが、礼拝や聖書の言葉にふれながら、自分と向き合い他者と共に心を育む教育が、どの学校でも丁寧に実践されています。今後は、この良心教育の核となる「徳育」の部分で、法人内諸学校がより意識的に連携を図っていくことが重要だと考えています。例えば各校には、キリスト教を教える教員がいますが、そうした先生方が学校の枠を超えて教育の場を持つことで、良心教育をより深化させていけるはずです。また、教育の国際化という課題を、諸学校が今まで以上に強く連携しながら推進していくことも必要です。徳育やグローバルな感覚は、体験や対話を通じて育まれるものだからこそ、世代を超えて学び合う機会を設けていくことが、同志社らしい教育の発展につながるのではないでしょうか。このような、良心を軸とした教育の連携を強めることが、一貫教育の価値をより明確にし、次の時代にふさわしい同志社の姿をかたちづくると考えています。

——50年後の社会において同志社はどうあるべきでしょうか？

今の時代は、大学の大衆化が進み、偏差値だけで大学を選ぶ傾向もあります。ですが私は、本来、大学というのは「どんな人物になりたいか」「どんなことを身につけられるか」を考え、それに近づくための学びの場であるべきだと思っています。同志社の教育が、そうした生き方に根ざした進路選択に寄与できるよう、良心教育の意義を社会に向けて積極的に発信していくことが必要です。150周年という節目は、まさにその絶好の機会です。「同志社は追及した良心教育に基づいて人物育成を行っている」ということをもう一度、世の中に問いかけていきたいと思っています。

同志社のビジョンについて

——創立200周年に向けたビジョンについて教えてください。

かつて新島襄は、勝海舟に「同志社の教育の完成には何年かかるか」と問われた際に「数百年はかかるだろう」と答えたといいます。彼の目指す人物をつくる教育の完成にはそれほどに長い時間が必要だということを、新島は理解していたのだと思います。そういう意味では150年といっても、まだまだ道の途中に過ぎません。しかもこれから先は、少子化が進み学校が淘汰される時代の中で、同志社がどう生き残り、どう未来に貢献していくのか。それはやはり私学としての特徴を明確にし、建学の精神を力強く打ち出していくことに尽きると考えています。とりわけ同志社の良心教育の核にある「徳育」の部分をこれからの時代にふさわしいかたちで再構築していくことが重要です。そのためには、単に学部を増やしたり、制度を再編するだけにとどまらず、時代に適合した人材育成の目標にかなった教育システム全体の再構築が求められていると感じます。そして、良心教育にふれた学生が、地の塩、世の光となって社会に貢献し、また、自分の子を同志社で学ばせたいと思ってもらう。この好循環こそ、同志社教育の理想のかたちであり、200年に向けて描いていくべき未来像だと考えています。

社会へのメッセージ

——最後に、同志社に関わるすべての方に向けてメッセージをお願いします。

同志社大学からは、毎年およそ6800人の卒業生が、女子大も含めれば年間約8300人の卒業生が社会に出て、それぞれの現場で活躍しています。その数は実に膨大です。ただ私は、卒業生が社会で活躍して終わりというふうには思いません。同志社で学んだことを社会に活かし、さらにそこで得た知識や経験を、また何らかの形で同志社へ還元していただけるような関係性を築いていきたいと考えています。つまり、同志社とのつながりを「在学中の時間」として切り取るのではなく、卒業後もずっと関係が続いていく生涯にわたる関係として捉えてもらいたい。それが、これからの私たちの願いです。

Road to the 150th

同志社創立150周年記念事業報告（2024～2025年度実施）

すべての事業は同志社創立150周年記念ウェブサイトで詳細をご覧いただけます。
また、(*)のある事業は動画をご覧いただけます。（肩書を含めた内容は、すべて当時のものです。）

https://150th.doshisha.ed.jp/project-fact/

同志社の繋がりの輪の強化・拡大

2023年度アイデアコンテスト最優秀企画（匂い袋制作）

日程：2024年8月24日（土）／場所：同志社国際中学校・高等学校 コミュニケーションセンター クリエイティブゾーン
2024年8月25日（日）／　同志社大学今出川キャンパス 至誠館3階 S32教室

2023年度に開催した「同志社創立150周年を盛り上げるアイデア」コンテストの最優秀賞企画「匂い香作り教室」を実施しました。香老舗 松栄堂協力のもと、同志社内の小学生から大学生までが匂い香作りを体験しました。両日合わせて109名の学生・生徒・児童が参加しました。

新島襄のラットランド・アピール150周年記念ツアー(*)

日程：2024年10月10日（木）～15日（火）4泊6日／訪問先：グレイス教会、フィリップスアカデミー、アーモスト大学オールドサウスチャーチ、ハーディー旧邸、コングリゲーショナルハウスなど

アメリカのアーモスト大学やフィリップスアカデミー等を巡るツアーを実施しました。新島が日本でキリスト教主義の学校を設立するための寄付を参加者にむけて訴えかけたラットランド・アピールから150周年にあたり、ヴァーモント州ラットランドのグレイス教会において10月13日に記念礼拝を執り行いました。27名の学生や生徒、卒業生、教職員、その家族が参加しました。

新島旧邸における八重茶会

日程：第1回2024年10月19日（土）、第2回2025年2月22日（土）、第3回2025年6月1日（日）／場所：新島旧邸

同志社大学茶道部との共催により行いました。掛軸には「紫気満」が掛けられました。「紫気」は吉兆の前触れを意味しています。同志社創立150周年の前触れを連想させます。菓子は同志社の徽章をイメージした「三友の集い」が用いられ、同志社人が絆を育むという思いが込められました。また茶会後には同志社社史資料センター調査員の案内による新島旧邸見学が行われました。

全同志社合唱祭(*)

日程：2024年11月9日（土）／場所：京都コンサートホール大ホール

同志社内各学校の23の合唱団が参加し、単独・合同併せて15ステージの合唱が繰り広げられました。827名の出演者全員による同志社カレッジソングなどの全体合唱では観客も交え、大迫力の合唱となりました。聴衆は1,288名でした。

＊ハリス理化学館同志社ギャラリー第32回企画展として、「合唱の同志社 －One Purpose DOSHISHA 合唱が紡ぐ150年 現在～過去～未来－」が2024年9月24日～11月17日まで同志社大学今出川キャンパスハリス理化学館同志社ギャラリー2階企画展示室で開催され、6,161名の参加がありました。

同志社創立150周年記念横断幕、ミニ幟（のぼり）、幟（のぼり）の設置

各学校および同志社と協定を締結している自治体などに横断幕を設置しました。また、幟とミニ幟も同志社内各学校や同志社生協等に設置しました。横断幕の設置に協力いただいた自治体は以下のとおりです。
会津若松市、安中市、風間浦村、京田辺市、寝屋川市、函館市、福島県（五十音順）

良心教育の浸透と拡散・発展

学校法人同志社創立150周年記念講演会（会津若松市）

日程：2024年9月21日（土）／場所：会津若松市文化センター

学校法人同志社は会津若松市との間で連携協力に関する包括協定を2012年に締結しました。2023年度より、毎年9月に行われる会津まつりにおいて同志社創立150周年記念講演会を開催し、2024年度は吉海 直人同志社女子大学名誉教授による講演「八重が結んだ会津若松と同志社」を実施し、92名の参加がありました。講演前には、会津若松市の高校生を対象としたバスツアーを実施し、新島八重ゆかりの地を巡りました。

“ふくしまサクラ”の植樹

日程：2025年1月17日（金）／場所：同志社墓地前広場等

学校法人同志社は福島県および会津若松市と福島復興のための包括連携協定を締結しています。同志社墓地への山道整備を記念して、同志社小学校6年生90名がふくしまサクラ“はるか”の苗木を同志社墓地前の広場とその山道に植樹しました。

新作能「庭上梅」の上演(*)

日程：2025年4月19日（土）／場所：同志社女子大学、同志社女子中学校・高等学校 栄光館

同志社大学能楽部観世会創部100年と同志社創立150周年を記念し、創立者新島襄を主人公とした新作能「庭上梅」を上演しました。上演前には、同志社大学能楽部金剛会に学生時代所属されていた澤田 瞳子氏（作家／2002年同志社大学大学院文学研究科文化史学専攻博士前期課程修了）による講演『「庭上梅」をめぐって』を行いました。当日は天候にも恵まれ、450名の一般観客と100名の同志社大学生の来場があり、能の最後（キリ）の部分では、客席の学生、卒部者も共に謡に参加しての大連吟となりました。

同志社創立150周年記念シンポジウム

同志社・慶應・早稲田が考える教育の未来～私学の役割と人材育成～(*)

日時：2025年5月17日（土）13:30～16:30／会場：同志社大学 今出川校地寒梅館ハーディーホール
主催：朝日新聞社／共催：学校法人同志社

慶應義塾の塾長、早稲田大学の総長及び同志社の総長・理事長による講演とパネルディスカッションを行いました。多様な視点から現代教育の課題や未来への展望が語られ、私学の根幹をなす建学の精神を再確認するとともに、今後の私学教育の在り方や人材育成のあり方について語り合いました。未来の教育環境や社会における役割について、それぞれの教育アプローチから特徴的な視点を示しました。

同志社墓地山道整備

若王子山頂にある同志社墓地への山道には、歩行者を助けるためにコンクリートの土台が設置されている個所もありましたが、多くは未整備の状態でした。歩行者が安全に、かつ歩きやすいように、同志社創立150周年記念事業の一環で山道の整備工事を行い、2025年1月に完成しました。

同志社人インタビュー

同志社内各学校の大学生、高校生がペアとなり、同志社の卒業生や現役学生にインタビューを行います。数珠繋ぎで次にインタビューをする方を前の方からご紹介いただくことになっています。これまで14名の方にインタビューにご協力いただきました。

写真は第9回：書家 川尾 朋子氏（2000年同志社女子大学生活科学部卒業）へのインタビューの様子